

# 最後の「大学人」

——野間一正先生を送る——

大場 恒 明

「彼は昔の彼ならず」ということばがあつて、太宰治にもたしかそのような題名の小説があつたはずだ。その筆法をもじつて言えば、大学は昔の大学ならず、学生は昔の学生ならず、大学教授も昔の大学教授ならず、である。

かつてはごくあたりまえであり、ことさらカッコづきにしてややこしい意味づけなどせず、誰にでもそのまま通じていた、つまりは常識であつたことが、今では、その常識が常識ではなくなり、今ある異常な姿のほうが常態となり、昔は単に大学と言えはすんだものが、今は、かつて存在していた「大学」というもの、とカッコづきで言わないと話が通じないという、まことに奇妙な、逆転した時代になつてしまった。

野間先生を、とりあえず、カッコづきで「大学人」とお呼びするのは、そういう意味でなのである。なによりも学問を愛する愛知者こそ本来的に大学人であり、大学が、学生であれ、教授であれ、そのような愛知者の集団

の住処だつた時代。そんな時代の大学人が野間先生であり、だから今となつてはカッコづきの大学人なのだ。しかし、絶対に野間先生をカッコづきで呼んではいけない。野間先生こそ、あるべき、あたりまえの、つまりは常識としての大学人を体現しておられるのだから。

学部がまもなく発足しようとしていた頃だつたと思うから、もう十年以上も昔のことになつてしまつたが、学部教員が箱根の保養所に泊り込んで学部運営の方針について討議をしたことがある。会議が終つて、夜、教員が三々五々、ロビーに寄り集まり、よもやまの話に興じているうち、たまたま、各国のお酒のことに話がおよんだとき、野間先生はスペインのワインについて、椅子から転げ落ちるのではあるまいかと心配になるほど熱っぽく語られ、しまいには、やおら立ち上がつて、スペイン人が地酒を皮袋からどういふふうに飲むかということ、まるで皮袋がそこにあるかのように肩にかついで、演じてみせてくださった。そのとき、私は、こよなくスペイ

ンを愛し、スペイン人を愛し、酒を愛する先生の姿を垣間見る思いがした。そして、このような方と同僚になったら大変なことになるのではあるまいかと、一瞬おびえたほどであった。

先生は遠方からお通いであるため、講義のある前夜は平塚にお泊りになり、街を広く深く探訪なさっておられたらしいが、私の徘徊するテリトリーとは重ならないせいか、酒場でごいっしょしたことはほとんどない。これが、今となっては心残りである。

先生にとって、大学とは、サンチアゴ・デ・コンポステラへの道を繰り返したどる巡礼者のように、教員であれ、学生であれ、生きるということの意味を求めて、知の世界をくまなく、はてしなく探索する場なのだろう。

ご自分の原点を確認するかのように、先生はスペインへの旅を繰り返される。そして、帰国されるたびに各地で遭遇されたことどもを、身振り手振りで聞かせてくださる。そのようなときのお姿のなかに、あの箱根での先生がなつかしくよみがえってくるのである。

大学はもはや向丘にそそりたつ知の殿堂ではない。栄華の巷がキャンパスに、教室に、学生のなかに、そしてわれわれ教員の心のなかに、逆らいようもなく入りこんでいる。

聖地ともいべき知の世界を旅する者のコンパスが、

先生のうちなる磁針とはあまりに違う方向に振れてしまっている現状を、先生はどんなに悲痛な思いに耐えて見据えておられることだろう。しかし、先生の磁針は微動だにしない。学生に対して、学ぶということに対して決して妥協はなさらない。知の伝道者としての教員の存在理由を決して見失うことはない。学生を教育するということに関して深く心を痛めておられる。非常勤講師として出講なさっている大学の学生と、本学部の学生の成績比較をたえずされては、顔をくもらせながら、そのデータを見せてくださる。

それだけに、たまに意欲のある学生に出会おうと先生の喜びようはひとかたではない。つい先日、経営学会主催の懸賞論文の審査ですばらしい論文を読んだよ、と目を輝かせて私の研究室に飛び込んでこられた。専任教員としての最後の年に、はじめて学生に対して希望が持てたとおっしゃって、とてもうれしそうであった。

そのようなとき、先生の人間的な純粹さ、価値あるものを愛でる無私の感性といったものにふれる思いがするのである。

二、三年前から、お眼の病いが進行して難儀されておられたようであったが、一昨年、その手術をされて、「視力もどおり、光のなかに扉が一挙に開いた思いがする。絵画の色彩がこれほどあざやかなものか、と驚いて

いる。これから楽しみだ」という内容の手紙をわざわざブリュッセルまで寄せてくださった。ふたたび色と光のなかへの回帰を果たし得た、ふるえるような喜びと幸福感が私にもひしひしと伝わってきた。先生が、おそらくそのような折に詠まれたものだろう、「冬空はかくに青きか眼帯とる」（『神大俳句』第六号）という一句は、先生という人間のすべてを表しているような思いがする。

異常な大学の現実と、日々、孤独な格闘を続けている教員はたくさんいる。先生の後に行く教員はたくさんいる。しかし、大学は別なものになってしまったのだ。振り子はもう元に戻ってはこない。せめて、この現場を、現実を、変えるために、なにがしかの希望を求めて、虚しさに抗しようという気力がまだわれわれのなかにわずかでも残されている今、最後の「大学」を去って行かれるのは、もしかすると、ある意味で幸せと申しあげなければならぬのかも知れない。

大学人であることの要諦を、行住坐臥においてお示しただいたことに、深い感謝をささげつつ、愛惜の念をこめて、去り行く先生の背に向けて呼びかけたい。

「プロフェッサー・おゝ・マイ・プロフェッサー！」